

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720188

研究課題名（和文）日本語学習者の言語使用データ蓄積と中間言語分析：韓国・朝鮮語母語学習者を中心に

研究課題名（英文）Storing up JSL Learner's Language Usage Data and Inter-Language Analysis: Focusing on the Data of Korean JSL Learners.

研究代表者

若生 正和 (WAKO MASAKAZU)

大阪教育大学・国際センター・准教授

研究者番号：40379326

研究成果の概要（和文）：インタビューやアンケートにより得られたデータを分析し、韓国・朝鮮語を母語とする日本語学習者の中間言語的特徴、特にモダリティー形式や格助詞の使用・習得に見られる言語処理ストラテジーを明らかにするとともに、その他の日本語学習者についても助詞の使用や引用に関して特徴を考察した。

研究成果の概要（英文）：Thorough this study I analyzed the JSL learners data collected by interviews and questionnaires, and discussed some characteristics of Korean JSL learners such as usage of locative case particles and modality form. I also investigated the other JSL learners' data and considered characteristics concerned with usages of particles, quotation, etc.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育、中間言語、第二言語習得、韓国・朝鮮語

## 1. 研究開始当初の背景

(1)日本語学習者の言語運用実態について、中間言語研究の観点からの研究が進められていた。誤用について見ると、旧来の対照言語研究のような母語の干渉という見方だけではなく、学習者が習得過程で試行錯誤の結果生み出す場合が多いことが明らかにされてきていた。

(2)韓国・朝鮮語と日本語は文法面で共通点が多く、韓国・朝鮮語を母語とする日本語学習者は、正の転移により他の言語を母語とする

者より習得が容易であると考えやすい。また、誤用は数少ない相違点の干渉と見なしやすい。しかし、韓国・朝鮮語母語学習者は習得過程での試行錯誤や独自の文法規則構築は行わないのか。他の言語を母語とする学習者と比較しつつ、中間言語の視点から研究する必要があった。

## 2. 研究の目的

(1)韓国・朝鮮語母語学習者に第二言語学習者特有の、独自の文法規則構築や学習・言語処理ストラテジーの反映はないかを明らかに

する。

(2)韓国・朝鮮語母語学習者の中間言語に他の言語を母語とする者との共通点は無いか、明らかにする。

### 3. 研究の方法

韓国・朝鮮語母語学習者とその他の日本語学習者に対しインタビューやアンケートを実施し、それぞれの日本語使用実態に見られる特徴を分析・考察する。

### 4. 研究成果

(1)

「韓国人日本語学習者の誤用分析」(『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』第59巻第1号、2010)では、韓国・朝鮮語母語学習者の中間言語には母語からの負の転移の他に、助詞や丁寧形の使用などに学習ストラテジーに起因すると見られる誤用が見られることが明らかになった。

具体的には、場所の助詞「に」と「で」は韓国・朝鮮語からの正の転移が期待できるにもかかわらず、韓国人上級学習者にも誤用が見られた。また、丁寧形の使用においては、品詞にかかわらず「んです」の多用が中級から上級の学習者に幅広く見られた。

(2)

「『んです』が多いんです：韓国人日本語学習者の文末丁寧表現の考察」(『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』第59巻第2号、2011年)では、上記(1)で明らかになった特徴のうち、特に文末丁寧表現に注目して分析を行った。本論文を通して、口語の文末表現に「んです」が多用される原因として、日本語学習者の言語処理ストラテジーが関係しているのではないかと指摘した。

日本語の丁寧形終止形は動詞の「ます」と形容詞・名詞等の「です」があり、それぞれに肯定形・否定形と過去・非過去時制があるために、学習者にとって複雑な体系となっている。習得過程にある学習者にとっては文法処理をするのに時間がかかる部分となるが、実際に発話する際にはその判断のための十分な時間が取れるとは限らない。一方、「んです」を使用すると品詞にかかわらず直前の用言を連体形にすれば良く、学習者にとっては言語処理の速度を上げることが可能となる。しかし、「んです」はモダリティーとして「です」「ます」には無い機能があるために、濫用すると誤用になってしまう。

言語習得においては学習・言語処理ストラテジーがどのように習得を推進し、また誤用を生み出すのかが重要な議論点になるが、上記の研究を通して日本語学習者の言語処理ストラテジーと誤用産出の関係の一端が明

らかになった。

(3)

(1)で指摘した場所の助詞「に」と「で」を混乱して使用する現象について、韓国で日本語を専攻する学生を主な対象としてアンケート調査を実施し、「韓国人日本語学習者による場所の格助詞『に』と『で』の選択に関する研究」(『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』第60巻第2号、2012)としてまとめた。この結果、格助詞の使用に正の言語転移が期待できる韓国語母語話者に場所の格助詞の誤用が見られること、他の言語を母語とする学習者と共通の言語処理ストラテジーが一部に見られることが明らかになった。これまでの研究では、述語動詞との関係にかかわらず、「前」「中」などの「位置名詞」には格助詞「に」を、建物や地名などを表す「場所名詞」には格助詞「で」を使用する傾向があると指摘されていた。本研究では、韓国人の場所の格助詞使用において、「で」を使用すべき時に「位置名詞+に」とする誤用は有意に多く、先行研究と同様の結果が出た。しかし、「場所名詞+で」については有意差は確認できなかった。

(4)

「留学生の使用する日本語に見られる諸特徴：中間言語分析の観点から」(『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』第61巻第1号、投稿中)では、母語の異なる4名の日本語学習者にインタビューを行い、分析し、2名以上の学習者に共通する誤用としてa)引用節におけるナ形容詞と名詞文の『だ』の脱落、b)連体形+連体助詞「の」、c)場所の格助詞「に」と「で」の誤用などが見られた。

a)については日本語母語話者のデータにも確認できる現象であり、日本人との会話の中で影響を受けている可能性も否定できない。また、第二言語学習者に見られる「過剰般化」の一例と見られ、韓国・朝鮮語母語学習者の「んです」の多用と今後比較してみたい。

b)はこれまで中国語母語話者に見られる特徴として考察されてきたが、より広い範囲の学習者を対象に研究を進める必要がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

[1] 若生正和 2010「韓国人日本語学習者の誤用分析」(『大阪教育大学紀要 第I部門人文科学』、査読無し、第59巻第1号)

[2] 若生正和 2011「『んです』が多いんです：

韓国人日本語学習者の文末丁寧表現の考察」  
（『大阪教育大学紀要 第 I 部門人文科学』、  
査読無し、第 59 巻第 2 号）

[3] 若生正和 2012「韓国人日本語学習者による場所の格助詞『に』と『で』の選択に関する研究」（『大阪教育大学紀要 第 I 部門人文科学』、査読無し、第 60 巻第 2 号）

[4] 若生正和（投稿中）「留学生の使用する日本語に見られる諸特徴：中間言語分析の観点から」（『大阪教育大学紀要 第 I 部門人文科学』、査読無し、第 61 巻第 1 号）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

若生 正和 (WAKO MASAKAZU)

大阪教育大学・国際センター・准教授

研究者番号：40379326